

法令及び定款に基づくインターネット開示事項

連結注記表 個別注記表

第93期(2018年4月1日から2019年3月31日まで)

株式会社日本製鋼所

「連結注記表」及び「個別注記表」に表示すべき事項に係る情報につきましては、法令及び定款第17条の定めに基づき、インターネット上の当社ホームページ(<https://www.jsw.co.jp/>)に掲載することにより株主の皆様提供しております。

連 結 注 記 表

1. 継続企業の前提に関する注記

該当事項はありません。

2. 連結計算書類作成のための基本となる重要な事項に関する注記等

(1) 連結の範囲及び持分法の適用に関する事項

①連結子会社の数 31社

((株)名機製作所、日鋼Y P K商事(株)、ファインクリスタル(株)、日鋼情報システム(株)、日鋼テクノ(株)、Japan Steel Works America, Inc.、SM PLATEK CO., LTD.、THE JAPAN STEEL WORKS(SINGAPORE)PTE. LTD. 他)

②非連結子会社の数 17社

(JSW Plastics Machinery (TAIWAN) Corp. 他)

非連結子会社は、連結会社の総資産、売上高、当期純利益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみてもいずれも小規模であり、連結計算書類に重要な影響を及ぼさないため、連結の範囲から除外しております。

③持分法適用会社の数 2社

(西胆振環境(株)、(株)ジーエムエンジニアリング)

非連結子会社(JSW Plastics Machinery (TAIWAN) Corp. 他16社)及び関連会社(寧波通用塑料機械制造有限公司 他1社)は、当期純利益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみてもいずれも小規模であり、連結計算書類に重要な影響を及ぼさないため、持分法を適用せず、原価法により評価しております。

(2) 連結子会社の決算日等に関する事項

連結子会社のうち、Japan Steel Works America, Inc.、SM PLATEK CO., LTD.、他6社の決算日は12月31日であります。

連結計算書類の作成に当たっては、Japan Steel Works America, Inc.、SM PLATEK CO., LTD.、他6社については連結決算日との差は3ヶ月以内であるため、12月31日現在の貸借対照表及び損益計算書を採用しておりますが、連結決算日との間に生じた重要な取引については連結上必要な調整を行っております。

(3) 会計方針に関する事項

①重要な資産の評価基準及び評価方法

イ. 有価証券

その他有価証券

時価のあるもの…期末日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの…移動平均法による原価法

ロ. デリバティブ……………時価法

ハ. たな卸資産

製品・仕掛品……………主として個別法による原価法(貸借対照表価額については、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

原材料・貯蔵品……………主として移動平均法による原価法(貸借対照表価額については、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

②重要な減価償却資産の減価償却方法

イ. 有形固定資産(ファイナンス・リース資産を除く)

主として建物及び建物附属設備については定額法、その他は定率法

主な耐用年数は以下の通りであります。

建物及び構築物 6～65年

機械装置及び運搬具 3～20年

ロ. 無形固定資産(ファイナンス・リース資産を除く)・長期前払費用

定額法

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における見込利用可能期間(5年)に基づく定額法

ハ. リース資産

ファイナンス・リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法

③重要な引当金の計上基準

イ. 貸倒引当金……………債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

ロ. 役員賞与引当金……………役員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき当連結会計年度に見合う分を計上しております。

ハ. 完成工事補償引当金……………完成工事に係る補償に備えるため、見積額を計上しております。

- ニ. 工事損失引当金……………当連結会計年度末の未引渡工事のうち、損失の発生が見込まれ、かつ、その金額を合理的に見積もることが出来る工事について、翌連結会計年度以降の損失見込額を計上しております。
- ホ. 風力事業損失引当金……………風力発電機の特定の部品の不具合に対応するため、損失見込額を計上しております。
- ヘ. 事業再構築引当金……………風力発電機事業の再構築のために、過年度販売済みの風力発電機に関する損失見込額を計上しております。
- ト. 役員退職慰労引当金……………役員の退職慰労金支出に備えるため、内規に基づく当連結会計年度末要支給額を計上しております。

④退職給付に係る会計処理の方法

イ. 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

ロ. 数理計算上の差異、過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用については、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異については、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額をそれぞれ発生の日から費用処理することとしております。

ハ. 小規模企業等における簡便法の採用

小規模企業等の連結子会社においては、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額または年金財政計算上の数理債務を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

⑤重要な収益及び費用の計上基準

当連結会計年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事については工事進行基準(工事の進捗率の見積りは原価比例法)を、その他の工事については工事完成基準を適用しております。

⑥重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、為替予約等の振当処理の対象となっている外貨建金銭債権債務については、当該為替予約等の円貨額に換算しております。

また、在外子会社等の資産及び負債は決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定及び非支配株主持分に含めて計上しております。

⑦重要なヘッジ会計の方法

イ. ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理によっております。なお、為替予約等が付されている外貨建金銭債権債務等については、振当処理の要件を満たしている場合は振当処理を行っております。

金利スワップについては、特例処理の要件を満たしている場合は特例処理を採用しております。

金利通貨スワップについては、一体処理(振当処理、特例処理)の要件を満たしている場合は一体処理(振当処理、特例処理)を採用しております。

ロ. ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段……………先物為替予約

ヘッジ対象……………外貨建受注工事の受取代価及び外貨建購買債務

ヘッジ手段……………金利スワップ、金利通貨スワップ

ヘッジ対象……………円貨建て借入金及び外貨建て借入金

ハ. ヘッジ方針

輸出入取引に係る為替変動リスク及び資金調達に係る金利変動リスク、為替変動リスクを回避するため、為替予約取引、金利スワップ取引及び金利通貨スワップ取引を行っております。そのため、実需取引を原則とし、投機目的のためのデリバティブ取引は行わない方針であります。

ニ. ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ対象とヘッジ手段の相場変動、キャッシュ・フロー変動の累計を比較し、両者の変動額等を基礎にして判断しております。

⑧のれんの償却方法及び償却期間

5年間の定額法

⑨その他連結計算書類作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

税抜方式によっております。

3. 表示方法の変更に関する注記

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日。)を当連結会計年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しております。

4. 連結貸借対照表に関する注記

- (1) 担保に供している資産
現金及び預金 99 百万円
(注) 担保に供している資産についてはデリバティブ取引等のため差し入れたもので、
当連結会計年度末現在対応債務は存在しておりません。
- (2) 有形固定資産減価償却累計額 183,901 百万円
- (3) 保証債務残高
非連結子会社銀行借入金等保証 963 百万円
従業員財形借入金保証 4 百万円

合 計 967 百万円
- (4) 受取手形裏書高 68 百万円

5. 連結損益計算書に関する注記

減損損失の内訳

当連結会計年度において、当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上しました。

用途	種類	場所
貸貸用資産	土地	東京都府中市
その他事業 投資先子会社の事業用資産	建物及び構築物、機械装置及び運搬具、 工具・器具・備品、その他の無形固定資産	北海道室蘭市及び 中国広東省

① 資産のグルーピングの方法

当社グループは、概ね独立したキャッシュ・フローを生み出し、継続的に収支の把握がなされる最小の管理会計上の単位に基づき資産のグルーピングを行っております。貸貸用資産については物件ごとにグルーピングを行い、減損損失の認識の判定及び測定を行っております。

なお、将来の使用が見込まれていない遊休資産については個々の資産ごとに減損損失の認識の判定及び測定を行っております。

② 減損損失の認識に至った経緯

収益性の低下により投資額の回収が見込めなくなったため、固定資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

内訳は次の通りであります。

機械装置及び運搬具	19 百万円
土地	1,597 百万円
その他	6 百万円
合 計	1,623 百万円

③ 回収可能価額の算定方法

貸貸用資産については正味売却価額により回収可能価額を測定しており、不動産鑑定評価額等により評価しております。事業用資産については使用価値により回収可能価額を測定しており、備忘価額により評価しております。

6. 連結株主資本等変動計算書に関する注記

- (1) 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位：株)

	当連結会計年度期首 株 式 数	当連結会計年度末 株 式 数
発行済株式		
普通株式	74,292,607	74,309,108
合 計	74,292,607	74,309,108
自己株式		
普通株式	802,503	803,082
合 計	802,503	803,082

- (2) 配当に関する事項

① 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
2018年 6月26日 定時株主総会	普通株式	1,469百万円	20.0円	2018年 3月31日	2018年 6月27日
2018年 11月5日 取締役会	普通株式	1,837百万円	25.0円	2018年 9月30日	2018年 12月5日

② 基準日が当期に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌期となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額	配当の原資	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
2019年 6月21日 定時株主総会	普通株式	2,205百万円	利益剰余金	30.0円	2019年 3月31日	2019年 6月24日

7. 金融商品に関する注記

(1) 金融商品の状況に関する事項

① 金融商品に対する取組方針

当社グループは、運転資金・設備資金については、まず営業キャッシュ・フローで創出した資金を投入し、不足分について必要な資金を当社及び連結子会社が各々調達（主に銀行借入や社債発行）しております。また一時的な余資は、安全性の高い金融資産で運用しております。デリバティブは、後述するリスクを回避するために利用し、投機的な取引は行わない方針であります。

② 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。また、海外で事業を行うにあたり生じる外貨建ての営業債権は、為替の変動リスクに晒されておりますが、必要に応じて先物為替予約を利用してヘッジしております。投資有価証券は、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。

営業債務である支払手形及び買掛金は、1年以内の支払期日であります。一部外貨建てのものについては、為替の変動リスクに晒されておりますが、必要に応じて先物為替予約を利用してヘッジしております。

借入金は、主に設備投資に係る資金調達を目的としたものであり、償還日は最長で決算日後7年であります。このうち一部は、金利の変動リスク及び為替の変動リスクに晒されておりますが、デリバティブ取引（金利スワップ取引及び金利通貨スワップ取引）を利用してヘッジしております。

デリバティブ取引は、外貨建ての営業債権債務に係る為替の変動リスクに対するヘッジを目的とした先物為替予約取引、借入金に係る支払金利の変動リスク及び外貨建ての借入金に係る為替の変動リスクに対するヘッジを目的とした金利スワップ取引及び金利通貨スワップ取引であります。なお、ヘッジ会計に関するヘッジ手段とヘッジ対象、ヘッジ方針、ヘッジの有効性の評価方法等については、前述の連結計算書類作成のための基本となる重要な事項に関する注記等における「会計方針に関する事項」の「重要なヘッジ会計の方法」をご参照下さい。

③ 金融商品に係るリスク管理体制

イ. 信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

当社は、債権管理規程に従い、営業債権について、各事業部門における営業管理部門が主要な取引先の状況を定期的にモニタリングし、取引相手ごとに期日及び残高を管理するとともに、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。連結子会社についても、当社の債権管理規程に準じて、同様の管理を行っております。

デリバティブ取引については、取引相手先を高格付を有する金融機関に限定しているため信用リスクはほとんどないと認識しております。

ロ. 市場リスク（為替や金利等の変動リスク）の管理

当社は、外貨建て営業債権債務について、通貨別月別に把握された為替の変動リスクに対して、必要に応じて先物為替予約を利用してヘッジしております。また、当社は、借入金に係る支払金利の変動リスク及び外貨建ての借入金に係る為替の変動リスクを抑制するために、金利スワップ取引及び金利通貨スワップを利用しております。

投資有価証券については、定期的に時価や発行体（取引先企業）の財務状況等を把握し、また、市況や取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直しております。

デリバティブ取引の執行・管理については、取引権限等を定めた管理規程に従い、担当部署が決裁担当者の承認を得て行っております。月次の取引実績は、経営会議に報告しております。連結子会社についても、当社のデリバティブ取引管理規程に準じて管理を行っております。

ハ. 資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払いを実行できなくなるリスク）の管理

当社は、各部署からの報告に基づき担当部署が適時に資金繰計画を作成・更新するとともに、手許流動性の維持などにより流動性リスクを管理しております。連結子会社は、担当部署が資金繰計画に基づき管理するとともに、定期的に当社へ報告しております。

④ 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。また、注記事項「金融商品の時価等に関する事項」におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(2) 金融商品の時価等に関する事項

2019年3月31日における連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次の通りであります。

なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含まれておりません。

(注2) 参照)

(単位：百万円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
①現金及び預金	74,304	74,304	—
②受取手形及び売掛金	64,921	64,921	△ 0
③投資有価証券 その他有価証券	26,852	26,852	—
資産計	166,078	166,077	△ 0
①支払手形及び買掛金	55,579	55,579	—
②短期借入金	12,088	12,088	—
③一年内返済予定の長期借入金	199	199	0
④長期借入金	39,208	39,723	514
負債計	107,076	107,590	514
デリバティブ取引(*)	(326)	(326)	—

(*) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、()で表示しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資産

①現金及び預金

預金はすべて短期であるため、時価は帳簿価額に近似していることから、当該帳簿価額によっております。

②受取手形及び売掛金

これらの時価は、一定の期間ごとに区分した債権ごとに債権額を満期までの期間及び信用リスクを加味した利率により割り引いた現在価値によって算定しております。

③投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっております。

減損処理を行った有価証券

当連結会計年度において、51百万円（その他有価証券で時価のある株式51百万円）減損処理を行っており、その他（投資有価証券評価損）として特別損失に計上しております。なお、減損処理にあたっては、連結会計年度末における時価が取得価額に比べ50%以上下落した場合には全て減損処理を行い、30～50%程度下落した場合には、回復可能性を考慮して必要と認められた額について減損処理を行っております。

負債

①支払手形及び買掛金並びに②短期借入金

これらの時価につきましては、時価は帳簿価額に近似していることから、当該帳簿価額によっております。

③一年内返済予定の長期借入金並びに④長期借入金

これらの時価につきましては、元利金の合計額を、新規に同様の社債の発行を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値によって算定しております。変動金利による長期借入金は金利スワップの特例処理及び金利通貨スワップの一体処理の対象とされており（下記デリバティブ取引参照）、当該スワップと一体として処理された元利金の合計額を、新規に同様の社債の発行を行った場合に適用される合理的に見積られる利率で割り引いた現在価値によって算定しております。

デリバティブ取引

- ①ヘッジ会計が適用されていないもの : 該当するものはありません。
 ②ヘッジ会計が適用されているもの : ヘッジ会計の方法ごとの連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額等は、次のとおりです。

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等		時価	当該時価の算定方法	
				うち1年超			
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 受取変動・ 支払固定	長期借入金	25,000	25,000	(*)	取引先金融機関から提示された価格によっております。	
金利通貨スワップの一体処理 (振当処理・特例処理)	金利通貨スワップ取引 受取米ドル・ 支払円 受取変動・ 支払固定	長期借入金	708	708	(*)	取引先金融機関から提示された価格によっております。	
為替予約等の振当処理	為替予約取引 売建	売掛金	米ドル	17,161	2,670	△ 266	先物為替相場によっております。
			ユーロ	1,557	131	30	
			円	41	—	△ 0	
	買建	買掛金	米ドル	853	—	8	
			ユーロ	2,661	682	△ 84	
			英ポンド	124	—	△ 14	

(*)金利スワップの特例処理及び金利通貨スワップの一体処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しておりません(上記負債参照)。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

区分	連結貸借対照表価額 (百万円)
非上場株式	2,226

非上場株式は、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積ることなどができず、時価を把握することが極めて困難と認められるため、「③投資有価証券 その他有価証券」には含めておりません。なお、非上場株式の当連結会計年度中の売却額は272百万円であり、売却益の合計額は263百万円であります。

8. 1株当たり情報に関する注記

- ① 1株当たり純資産額 1,746円91銭
 ② 1株当たり当期純利益 271円69銭

9. 重要な後発事象に関する注記

9-1. 連結子会社の吸収合併

当グループは、2019年1月29日開催の取締役会決議に伴い、2019年4月1日に親会社である株式会社日本製鋼所は連結子会社である日鋼情報システム株式会社を吸収合併しております。

(1) 取引の概要

①結合当事企業の名称及び事業の内容

結合当事企業の名称 日鋼情報システム株式会社
 事業の内容 コンピュータシステムのコンサルティング、受託開発、技術指導に関する事業ほか

②企業結合日

2019年4月1日

③企業結合の法的形式

当社を存続会社とし、日鋼情報システム株式会社を消滅会社とする吸収合併

④結合後企業の名称

株式会社日本製鋼所

⑤その他取引の概要に関する事項

日鋼情報システム株式会社は、当社の完全子会社として1990年4月に設立後、当社の情報システム運営管理及び受託開発事業を主に担って参りましたが、先端的な情報技術(機械学習等)が当社の製品価値・サービス価値向上に重要な要素であることに鑑み、機能強化を図る目的で本合併を行うものであります。

(2) 会計処理の概要

「企業結合に関する会計基準」(企業会計基準第21号 2013年9月13日)及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第10号 2013年9月13日)に基づき、共通支配下の取引として会計処理を実施する予定であります。

9-2. 関連会社の持分追加取得による子会社化

当グループは、2019年3月19日開催の取締役会において、関連会社でありました株式会社ジーエムエンジニアリングを子会社化することについて決議いたしました。これに伴い、2019年4月1日に株式を取得しております。

(1) 企業結合の概要

① 被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 株式会社ジーエムエンジニアリング
事業の内容 プラスチック用シート装置・押出成形機等の設計・製造及び販売、
ダイ及び付属装置の設計・製造及び販売

② 企業結合を行った主な理由

シート装置事業の強化・拡大

③ 企業結合日

2019年4月1日

④ 企業結合の法的形式

現金を対価とする株式取得

⑤ 結合後企業の名称

結合後企業の名称に変更はありません。

⑥ 取得した議決権比率

企業結合直前に所有していた議決権比率 21.75%

企業結合日に追加取得した議決権比率 60.50%

取得後の議決権比率 82.25%

⑦ 取得企業を決定するに至った主な根拠

当社が現金を対価として株式を取得したことによるものであります。

(2) 被取得企業の取得原価及びその内訳

取得の対価	現金	1 3 1 百万円
取得原価		1 3 1 百万円

(3) 主要な取得関連費用の内容及び金額

アドバイザー費用等 5 百万円

(4) 被取得企業の取得原価と取得するに至った取引ごとの取得原価の合計額との差額

段階取得に係る差損 8 9 百万円

(5) 発生した負ののれんの金額、発生原因

① 発生した負ののれん

3 6 0 百万円

② 発生原因

株式会社ジーエムエンジニアリングの時価純資産が取得原価を上回ったためであります。

(6) 企業結合日に受け入れた資産及び引き受けた負債の額並びにその主な内訳

流動資産	1, 7 2 2 百万円
固定資産	6 5 4 百万円
資産合計	2, 3 7 7 百万円

流動負債	1, 2 7 5 百万円
固定負債	5 0 3 百万円
負債合計	1, 7 7 8 百万円

個 別 注 記 表

1. 継続企業の前提に関する注記

該当事項はありません。

2. 重要な会計方針に係る事項に関する注記

2-1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

① 子会社株式及び関連会社株式…移動平均法による原価法

② その他有価証券

時価のあるもの……………事業年度末日の市場価格等に基づく時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの……………移動平均法による原価法

(2) デリバティブ等の評価基準及び評価方法

デリバティブ……………時価法

(3) たな卸資産の評価基準及び評価方法

① 製品・仕掛品……………主として個別法による原価法

(貸借対照表価額については、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

② 原材料・貯蔵品……………主として移動平均法による原価法

(貸借対照表価額については、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

2-2. 固定資産の減価償却の方法

① 有形固定資産（ファイナンス・リース資産を除く）

建物及び建物附属設備については定額法、その他は定率法

主な耐用年数は以下の通りであります。

建物及び構築物 6～65年

機械装置及び運搬具 3～20年

② 無形固定資産（ファイナンス・リース資産を除く）・長期前払費用

定額法

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における見込利用可能期間（5年）に基づく定額法

③ リース資産

ファイナンス・リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法

2-3. 引当金の計上基準

① 貸倒引当金 ……債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

② 役員賞与引当金 ……役員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額の当事業年度に見合う分を計上しております。

③ 完成工事補償引当金 ……完成工事に係る補償に備えるため、見積額を計上しております。

④ 工事損失引当金 ……当事業年度末の未引渡工事のうち、損失の発生が見込まれ、かつ、その金額を合理的に見積もることが出来る工事について、翌事業年度以降の損失見込額を計上しております。

⑤ 風力事業損失引当金 ……風力発電機の特定の部品の不具合に対応するため、損失見込額を計上しております。

⑥ 事業再構築引当金 ……風力発電機事業の再構築のために、過年度販売済みの風力発電機に関する損失見込額を計上しております。

⑦ 退職給付引当金 ……従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

イ. 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

ロ. 数理計算上の差異、過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌事業年度から費用処理しております。

⑧ 関係会社事業損失引当金…関係会社の事業の損失に備えるため、損失負担見込額を計上しております。

2-4. 収益及び費用の計上基準

当事業年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事については工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を、その他の工事については工事完成基準を適用しております。

2-5. その他計算書類の作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異、未認識過去勤務費用の未処理額の会計処理の方法は、連結計算書類におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(2) 外貨建ての資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益処理しております。
なお、為替予約等の振当処理の対象となっている外貨建金銭債権債務については、当該為替予約等の円貨額に換算しております。

(3) ヘッジ会計の方法

① ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理によっております。なお、為替予約等が付されている外貨建金銭債権債務等については、振当処理の要件を満たしている場合は振当処理を行っております。

金利スワップについては、特例処理の要件を満たしている場合は特例処理を採用しております。

金利通貨スワップについては、一体処理（振当処理、特例処理）の要件を満たしている場合は一体処理（振当処理、特例処理）を採用しております。

② ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段……先物為替予約

ヘッジ対象……外貨建受注工事の受取代価及び外貨建購買債務

ヘッジ手段……金利スワップ、金利通貨スワップ

ヘッジ対象……円貨建て借入金及び外貨建て借入金

③ ヘッジ方針

当社は、輸出入取引に係る為替変動リスク及び資金調達に係る金利変動リスク、為替変動リスクを回避するため為替予約取引、金利スワップ取引及び金利通貨スワップ取引を行っております。

そのため、実需取引を原則とし、投機目的のためのデリバティブ取引は行わない方針であります。

④ ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ対象とヘッジ手段の相場変動、キャッシュ・フロー変動の累計を比較し、両者の変動額等を基礎にして判断しております。

(4) 消費税等の会計処理

税抜方式によっております。

3. 表示方法の変更に関する注記

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 2018年2月16日。）を当事業年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しております。

4. 貸借対照表に関する注記

(1) 有形固定資産の減価償却累計額 173,160 百万円

(2) 偶発債務

関係会社銀行借入金等保証 2,811 百万円

従業員財形借入金保証 4 百万円

合計 2,815 百万円

(3) 関係会社に対する金銭債権・債務

① 短期金銭債権 21,005 百万円

② 長期金銭債権 1,450 百万円

③ 短期金銭債務 19,674 百万円

④ 長期金銭債務 81 百万円

5. 損益計算書に関する注記

(1) 関係会社との取引高

① 売上高 32,477 百万円

② 仕入高 46,463 百万円

③ 営業外取引高 4,305 百万円

(2) 減損損失の内訳

当事業年度において、当社は以下の資産について減損損失を計上しました。

用途	種類	場所
賃貸用資産	土地	東京都府中市

① 資産のグルーピングの方法

当社は、概ね独立したキャッシュ・フローを生み出し、継続的に収支の把握がなされる最小の管理会計上の単位に基づき資産のグルーピングを行っております。賃貸用資産については物件ごとにグルーピングを行い、減損損失の認識の判定及び測定を行っております。

なお、将来の使用が見込まれていない遊休資産については個々の資産ごとに減損損失の認識の判定及び測定を行っております。

② 減損損失の認識に至った経緯

収益性の低下により投資額の回収が見込めなくなったため、固定資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

内訳は次の通りであります。

土地 1,597 百万円

合計 1,597 百万円

③ 回収可能価額の算定方法

当資産グループの回収可能価額は正味売却価額により測定しており、不動産鑑定評価額等により評価しております。

6. 株主資本等変動計算書に関する注記

(1) 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位：株)

	当事業年度 期首株式数	当事業年度末 株式数
発行済株式		
普通株式	74,292,607	74,309,108
合 計	74,292,607	74,309,108
自己株式		
普通株式	802,503	803,082
合 計	802,503	803,082

(2) 配当に関する事項

① 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
2018年 6月26日 定時株主総会	普通株式	1,469百万円	20.0円	2018年 3月31日	2018年 6月27日
2018年 11月5日 取締役会	普通株式	1,837百万円	25.0円	2018年 9月30日	2018年 12月5日

② 基準日が当期に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌期となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額	配当の原資	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
2019年 6月21日 定時株主総会	普通株式	2,205百万円	利益剰余金	30.0円	2019年 3月31日	2019年 6月24日

7. 税効果会計に関する注記

繰延税金資産の発生は、固定資産減損損失、減価償却限度超過額、退職給付引当金の否認等であり、繰延税金負債の発生は、その他有価証券評価差額金であります。

8. 関連当事者との取引に関する注記

① 子会社及び関連会社等

(単位：百万円)

種類	会社の名称	議決権の 所有割合	関連当事者 との関係	取引の 内容	取引金額	科目	期末残高
子会社	日鋼YPK商事 株式会社	所有 直接100%	製品の販売等 役員の兼任	当社機械製品等の 販売(注)	17,438	売掛金	9,698
子会社	Japan Steel Works America, Inc.	所有 直接100%	製品の販売等 役員の兼任	当社機械製品等の 販売(注)	5,151	売掛金	2,942
子会社	日鋼テック株式会社	所有 直接100%	製品の加工等 役員の兼任	当社機械製品の 機械加工・熱処理 ・製缶等(注)	12,303	支払手形	3,195

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

価格その他の取引条件は、市場価格・総原価等を勘案して個別に交渉のうえ決定しております。

9. 1株当たり情報に関する注記

① 1株当たり純資産額

1,442 円81銭

② 1株当たり当期純利益

233 円08銭

10. 重要な後発事象に関する注記

10-1. 連結子会社の吸収合併

当社は、2019年1月29日開催の取締役会決議に伴い、2019年4月1日に当社連結子会社である日鋼情報システム株式会社を吸収合併しております。

(1) 取引の概要

① 結合当事企業の名称及び事業の内容

結合当事企業の名称 日鋼情報システム株式会社

事業の内容 コンピュータシステムのコンサルティング、受託開発、技術指導に関する事業ほか

② 企業結合日

2019年4月1日

③ 企業結合の法的形式

当社を存続会社とし、日鋼情報システム株式会社を消滅会社とする吸収合併

④ 結合後企業の名称

株式会社日本製鋼所

⑤ その他取引の概要に関する事項

日鋼情報システム株式会社は、当社の完全子会社として1990年4月に設立後、当社の情報システム運営管理及び受託開発事業を主に担って参りましたが、先端的な情報技術（機械学習等）が当社の製品価値・サービス価値向上に重要な要素であることに鑑み、機能強化を図る目的で本合併を行うものであります。

(2) 会計処理の概要

「企業結合に関する会計基準」（企業会計基準第21号 2013年9月13日）及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第10号 2013年9月13日）に基づき、共通支配下の取引として会計処理を実施する予定であります。

10-2. 株式取得による会社等の買収

当社は、2019年3月19日開催の取締役会において、関連会社でありました株式会社ジーエムエンジニアリングを子会社化することについて決議いたしました。これに伴い、2019年4月1日に株式を取得しております。

(1) 買収する相手会社の名称、事業の内容、規模

① 被取得企業の名称及び事業の内容

被取得企業の名称 株式会社ジーエムエンジニアリング

事業の内容 プラスチック用シート装置・押出成形機等の設計・製造及び販売、ダイ及び付属装置の設計・製造及び販売

資本金 40百万円

② 株式取得の目的

シート装置事業の強化・拡大

③ 株式取得の時期

2019年4月1日

④ 取得株数、取得対価及び取得後の持分比率

取得株数 484株

取得対価 96,800,000円

取得後の持分比率 82.25%

⑤ 支払資金の調達方法及び支払方法

自己資金により充当

11. その他の注記

国庫補助金により取得した資産の取得原価から控除している圧縮記帳額

建物 98 百万円

構築物 23 百万円

機械装置 898 百万円

工具・器具・備品 270 百万円

無形固定資産 19 百万円